

ハヤブサの餌メニュー

溝田浩美
(ひとはく地域研究員)

はじめに

ハヤブサは鳥類を主に餌としている昼行性猛禽類である。狩りをするために障害物のない広い空間と、営巣場所として切り立った崖を必要とすることから、日本ではほとんどのハヤブサが海沿いに生息している。しかし、近年、都市へ進出する例が数多く確認され、各地の都市から観察の報告がもたらされるようになった。調査地の住宅街においても2000年頃よりその姿を見かけるようになり、捕食した鳥類などの残骸が鉄塔の下に落ちてくるようになった。本講演では、2年間の継続調査から明らかとなった「住宅地に暮らすハヤブサの採餌生態」の一部について報告する。

調査地・調査方法

調査対象のハヤブサは、丘陵地の住宅街に建設された高圧鉄塔を狩りの場として利用していた。この鉄塔の高さは約57mであり、周囲の見晴らしが良いことからハヤブサにとって格好の狩り場となっていたようである（写真1）。

調査期間は2003年10月1日から2005年12月7日までの2年2カ月の間であり、その間、ほぼ毎日ハヤブサの行動観察を行い、数日間隔で餌となった鳥類や哺乳類の残骸の回収を実施した。

結果

2年2カ月で回収した鳥類・哺乳類の残骸は220個体であり、25種におよぶ多様な餌が確認された。このうち、最も利用された餌はアオバトであり、次いでキジバト、カイツブリの順に利用頻度が高かった。餌の重量は5gから500g以上と幅広かったが、主要な餌の重量は200g前後となっていた。食事の時間帯は二山型であり、朝方と夕方にそれぞれピークが確認された。

上記したハヤブサの餌利用は季節的に変化し、秋から冬（10月から翌年2月）には、主に100g以上の鳥類を朝方に摂食した。また、夏（7月、8月、9月）には、コウモリなど50g以下の小さな餌を主な餌とし、それらを夕方に繰り返し追う姿が観察された。夕方の狩りの成功率は55%で、平均所要時間は90秒であった。



写真1

まとめ

住宅地に暮らすハヤブサは、25種類におよぶ多様な餌を利用していた。200g前後の鳥類が主要な餌となっていたが、餌の種類やサイズは季節によって変化していた。また、食事時刻も季節的に変わり、秋・冬には朝方に、夏には夕方にそれぞれピークがあった。